

انوجه الى زملائي الهندسة اليابانية بالبريد بطلب
 من مجلة ربيع الهندسة بالبريد. وانتم هم خالد قنات
 كهنيسه بنبيه اسيرا جهم لرماد رستم بطلب
 مصر سنملاو سنازتهم لنا ان سناز الهندسة
 بالبريد ذات الطابع العالميه. وشكرهم جدا بزيادة
 با سناز سنازنا بمرجع المل
 مع اطيب تحياتي والسلام عليكم ورحمة الله وبركاته
 نبيل
 نبيل

ナビール氏のメッセージ

上げています。ただ、この名だたるイスラム教の国は禁酒国であるから、酒が手に入らない。酒の代わりにシャイ(紅茶)を飲む。飲めば歌って踊る。カイロのベリーダンスはセクシーで楽しいが、髭面の男たちのそれはグロテスクである。

フィキ氏のアシスタント・エンジニアは大学卒業後1年目、つまり7号給の多感な青年だが、彼はこのプロジェクト現場を Open Jail (開かれた牢獄) にたとえる。半年ごとの、カイロの恋人に会える日を指折り数えて待っている。索漠たる不毛の地に、土木屋1年目を過ごす彼は、ナイル河の滔々たる緑の水の流れへの郷愁と、若さ特有の繊細な情感などがさくそうして、定期的に躁と鬱の状態を繰り返している。

5. 日本の皆さまへ

さて、最後に本誌のこの企画に対して、ナビール氏とムスタファ氏がメッセージを寄せてくれた。紹介しよう。ナビール氏のそれは「日本の技術屋の方々へ。私は土木屋として、大規模な国外現場で働くことによって祖国に寄与する喜びをかみしめている。それにも増して、わが愛する妻と子が、ともにここにあることによって、その喜びを増してくれる」といった意味だ。ムスタファ氏のものは「すべての日本の技術者の皆さまへ。世界中の人びとの進歩と平和のために奮闘しようではないか」といった意味である。このロマンチストで、熱烈なイスラム教の信奉者は、スビルウェイのクローラードリルのせん孔音の中で、日本人にコーランの詩句を説いたものだ。そしてその説教の最後には、いつでも溜息まじりに「ムスリムの本質は、あなたには、結局のところわからないだろう。なぜなら、あなたは詩人ではないからだ」と結ぶのである。日本人はつぶやいた。「そうだろう。それでケッコウさ。しかしそれでも、砂漠には日本の演歌がよく似合うよ」。

② フランス
町井旦昌*

3人のフランス人鉄道土木屋のことを書いてみたい。フランス人は鉄道員のことを“シュミノール”という愛称で呼んで独特の雰囲気表現するが、その土木屋にも一種独特の味わいがあった。

ボルセイ氏とモンターニェ君は、フランス国鉄のエンジニア、ヴノー氏は国鉄から海外技術援助のためにザイール共和国に派遣されているエンジニアだ。

1. ボルセイ氏のこと

1968年5月。パリの東南 235 km にあるヌベールでボルセイ氏に会った。ヌベールは人口4万人程度の中都市で、10世紀ころの教会やカテドラルが残っている落ち着いたたずまいの街であった。ロアール河沿いのマロニエの大樹が白と紅の花をつけていたところで、フランスの保線を実地に見学するために、はるばる彼を訪ねてやってきた。

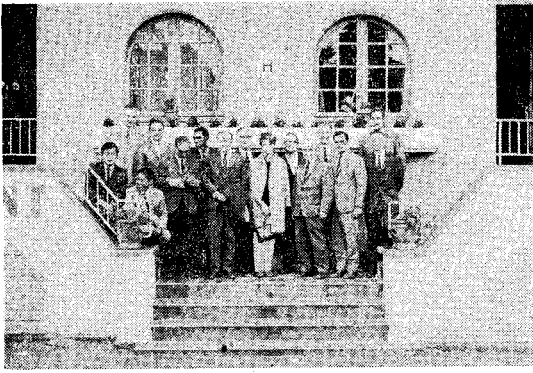
ボルセイ氏はこの街にある国鉄事務所の保線主任である。長身、柔和な笑顔を絶やさない40才ぐらゐのエンジニアで、職業学校で土木を勉強し卒業してからは、ずっとこの付近の現場を渡り歩いてきたという。ゆっくりとわかり易いフランス語で保線現場の仕事の流れから仕事の一つ一つに至るまで細かい数字を使って説明しおえると「さて」と彼は言った。

「保線の技術はすべて現場にあります。現場、しかも職人の腕と道具にそのすべてが集められています。ムッシュー・マチイ」。

自らルノー16のハンドルを握り保線の現場を回る。気軽に差し出す手に、線路工手は手が汚れているので、手を出すかわりに腕を差し出し親しみをこめた握手を交わす。「これがカナブール。あなたもやってみますか？ 浮きまくらぎ(ダンスーズ、つまり「踊り子」とフランス語でいう)発見器です」。次々と知恵のかたまりのような道具を見せてくれる。

あるとき、車の中で線路の横抵抗力の話をしたことがあった。私がすっかり忘れていかけた1週間ほど経

* 国鉄施設局保線課補佐



(ヌバールで)

ボルセイ氏(右から4人目)と筆者(左端)

ってから、ボルセイ氏は、論文のコピーをくれた。フランス国鉄のブリュドム氏の書いた「垂直荷重を受けた軌道の横抵抗力について」と題する論文で、彼はその要点を私に説明し、「何か意見はあるか?」と尋ねた。「ノン」ブリュドム氏はわが国でも名の知られたその道の大家である、なんの異存があるろうと私は思っていた。

ボルセイ氏は、しかし冷静に自分の意見を語った。なぜならば……なぜならば……を繰り返しながら。

当時の古ぼけたメモを開いて見ると、保線技術の粋がキラキラと輝いて語りかけてくるようだ。

2. ポリテクニシャンのモンターニェ君

28才・ポリテクニシャン(エコールポリテクニク出身で、学歴偏重の色濃いフランス社会でも最高級にランクされる。フランスのある新聞は「ポリテクニシャンはフランスのマフィアだ」と書いた)。

昨年秋、日仏交換技術者として来日した。自ら注文をつけたハードスケジュールで日本国内を精力的に回り、東京へ帰ってきたところで、フランス国鉄でお世話になったよしみから銀座の小料理へ案内し、そのときいろいろと旧交をあたためた。まだ頬に赤味のさした純朴そう



東京のモンターニェ君(左)

なエンジニアシビル(シビルエンジニア)で、卒直で人の気をそらさない青年であった。

彼は酒の席では不粋とされるその不粋な話を延々とした。「ロングレール区間での木まくらぎとPCまくらぎの得失は?」「波状摩耗対策として効果の上がった方法は?」「締結装置の弾性率を下げるとどんな効果がありますか?」。

ここ数日間の滞在で、自らの目と耳とで得たデータを自分の問題意識の整理箱に納めながら次々と質問と意見を浴びせてくる。

ときどき日本酒を空けてはいるが、関心はもっぱら自分が担当しているパリーリオン間の新線建設にあるらしい。

言葉が不自由だから会話は簡潔にならざるを得ない。彼は自分でよく理解できないと何度も忍耐強く聞き直してくる。いきおい私も頭をひねって緊張することになる。言葉の不自由な外国人との会話が、言葉に何も不自由のない日本人どうしの会話以上に充実感があるのは、こんなところに理由があるのかも知れない。

学会会報の最近号に、小林善彦氏が日本人とフランス人とのものの考え方の順序という、興味ある話を書いておられる。

留学生試験でフランス人試験官が「あなたはなぜフランスに行きたいのですか?」と尋ねると、たいていの日本人はその理由を、高校時代からフランス文学に親しんだこと、そのためにフランス語の勉強をし大学の卒業論文ではポールヴァレリーを選んだことなどをくどくど述べた後で、「だからフランスへ行きたいのです」と答えるという。

そこでフランス人試験官は非常にいらだってくるというのである。ところが、フランス人は結論を先に出す。その理由を結論に近いものから述べる。

つまり、フランス人(他のヨーロッパ人もそうかも知れないが)と日本人とは発想の順序が違うのだ。お互いにわかりわからせるのが会話であるならば、このことは大切だと思われる。

さて、モンターニェ君のこと。ポリテクニシャンであることはすでに述べたが、フランス国鉄がどれくらい彼に給料を払っているか、フランスの著名ななんでも事典“Quid?”で調べてみると下表のとおりである。

区 分	23~24 才	28~30 才
ポリテクなどグランド・エコール出身	51 400 フラン (308 万円)	67 700 フラン (406 万円)
その他の大学・学校出身	41 200 フラン (247 万円)	53 200 フラン (319 万円)

注: ① 年収を示した。

② 1フラン60円で換算。

パリーリヨン線建設に取り組んでいる。

3. ザイールでのヴノー氏

ルイ・ヴノー氏は、ザイール共和国（赤道アフリカ）の国鉄で、フランス政府派遣の顧問として働いている。7,8年前に、フランス国鉄から出向して、奥さんと2人でやってきた。40才に手の届くか届かないかの年令である。

1972年、私がザイールへ出張したとき会った。次の年再び会う機会があった。

小柄で、両切りのタバコを口にくわえたまましゃべるくせは、フランス人そのものを思わせた。

名刺には

Office central des chemins de fer d'outre mer
(海外鉄道事務所) ルイ・ヴノー

とあった。この事務所はパリにあって、鉄道部門で海外技術援助をするため政府機関である。彼はそこから派遣されている鉄道士木屋の一人であった。

私はヴノー氏と3週間ほどザイール共和国の新線ルートや既設線の設備を見て回った。白ジャンパーをひっかけ、いつものくわえタバコで「ボンジュール/サバ？」と毎朝の挨拶から「アドゥマン」のさよならまで、われわれの仕事をよく助けてくれた。

彼の事務所にはザイール人のスタッフがいるが、ほとんどの仕事は彼一人で切り回していた。ザイールへきてからコツコツと仕上げた仕事は、「キンシャサーマタディ鉄道軌道改良工事計画書」に集約されている。

ザイール人を育てながら自らも成果を期待される仕事は、はた目以上につらいに違いないが、持ち前の楽天主義で、毎日を愉快に過ごしている。われわれは短期間に効率よく調査活動をしなればならななかつたのでヴノー氏の存在はとても有難かつた。必要な資料やデータはほとんどすぐ揃ったし、そのためにクドクド説明することもなかつた。

調査旅行中、夕食後のだんらんでもヴノー氏は無駄口をたたくことは余りなく、私の知りたようなことを要領よく説明してくれたりした。

さて、彼自身の財布の中味であるが、アフリカ地域に派遣される場合、フランス国内の給与の260%、年1回フランスまでの往復旅費(家族含む)、住宅、車の費用などが支給される。

日本大使館のパーティーで会ったときは、自慢の美人の奥さん同伴で「女房はアキテヌです」と片目をつぶって紹介してくれた。アキテヌはフランス南西地方の名前で、美人の多いことで知られている。

③ 西 ド イ ツ
星 野 邦 男*

あなたの職業は？という質問にわれわれは日常よく接する。この間に対して西ドイツの土木技術者は、大学の助手をしていても、建設会社やコンサルタント（設計事務所）に勤めていてもDipl.-Ing.（ディプロムインジュニア）であるとか、Ing.（インジュニア）であるとか答える。それぞれ「大学出の工学士」、「専門学校出の技士」というような意味の資格を表わす言葉であるが、日本でなら「大学助手」、「会社員」というように答えるところであろう。西ドイツと同様な答え方をする国も多いであろうが、土木技術者に関しての両国の相違のある一面は、この答えに象徴的に表われているように思われる。私は1968年から7年間、シュツットガルト市で生活し、その間シュツットガルト大学のレオンハルト研究室に3年間在籍して学位論文に携わり、4年間をレオンハルト設計事務所に勤務して過ごした。ここでの記述はこの限られた経験の中からのものであり、またその間の業務がほぼ橋梁に関するもののみであった関係上、橋梁技術者を中心としたものになることをお許しいただきたい。

1. 資格と職場の選定

前述の二つの資格や製図士関係の資格などがあるが、求職にしろ求人しる資格を元に行われる。この際、新聞や専門誌の求人求職欄の利用が活発で、資格のほかにどのような経験を持ち、どのような種類の仕事を望むのかなどが併記されることが多い。特に年令的に若いときには、施工会社、設計事務所、大学助手等、職場を変えることもよく行われるが、種々の経験を積み、より有利な条件を求めることが主眼であり、事実給与などは職場を移るたびによくなるのが普通である。構造設計に限れば、建物や住宅も含まれているので、こういった小規模な仕事からはじめられる手軽さも原因して、自分で、あるいは友人と事務所を開いていく例も多い。いずれにしろ、一人の技術者として資格と経験で技術を売りものしながらよい条件を求めて生活していくのであり、これ

* 正会員 工博(Dr.-Ing.) (株)長大橋設計センター